

空の口ヒラ

今月のゲスト

山本峰雄氏

聞き手 毎日新聞社 郡 捷

科学する少年

郡 先生はお国は？

山本 私が生れたのは静岡市なんです。小学校に入るとき東京へ来たわけです。その当時、飛行機が日本でもちょうどはじまった時で、いまでもまだとってありますが、“少年”とか“日本少年”とかいう雑誌で熱を上げてましたね。

郡 なるほど。

山本 飛行協会発行の“飛行界”というのがありましてね。

郡 “飛行界”はなつかしいな。

山本 当時、“飛行界”や“少年”にててた徳川大尉やなんかがわれわれ少年の英雄でね。飛行機の方じゃモーリス・ファルマンだのグラデー

対談する山本氏(右)と郡氏(左)



山本峰雄氏の略歴

明治36年 静岡市に生る。
 昭和3年 東大工学部航空学科卒。
 同年 東大航空研究所に入る。
 昭和13~14年 航空機構造学研究のため、アメリカヨーロッパへ留学。
 現在 群馬大学教授。東大・慶大・明大各講師。

だのがさかんに飛んで、熱をあふられたわけですよ。

郡 なるほどね。

山本 その当時でもやはり飛行機の好きな人たちのグループがありましたね。

郡 小学校はどちらで？

山本 市ヶ谷小学校です。

郡 ほう、市ヶ谷小学校ですか？

山本 その当時わたしたちの一年先輩で、飛行協会の理事長かなんかやっていた人の息子が近所にいたんです。時どき集ってつまらんものを書いてはそのオヤジさんにみせて、みんなで発明をきそったものですよ。

郡 なるほどね。科学する少年というわけですね。

山本 たとえばライトの飛行機の図面を書いてみたり、墜落しない飛行機の発明をやったり、そんなことしてましたよ。小学校の4年か5年の時でしたか、スミスというのが来ましてね。

郡 ええ、きましたね。

山本 そのスミスが青山でものごい風のある日に飛びましてね。

郡 20メートル

くらい吹いてましたかね。

山本 その中を上って、宙返りをやったんです。あの当時の飛行機は前に車輪がありましてね。そこからアウトリガーが出てまして、そのアウトリガーの上に鳥打帽子を後向けにかぶって乗りましてね。当時まだ小学生でしたが、牛込の原町から青山まで一人で歩いて見に行ったものですよ。途中で道がわからなくなってしまった。(笑) まあそんな雰囲気です。

スパッド戦闘機を見て……

郡 中学は？

山本 四中です。とにかくやましい学校で、勉強一点ばり、しばらく飛行機のことを忘れてました。そして高等学校に入りまして軍事教練で三島に行ったんです。そしたら三島の練兵場で陸軍の飛行機が飛んでいたのをみて再燃したというわけです。

郡 なるほどね。そのころですとスパッド戦闘機ですか？

山本 ええ、スパッドです。しかし小学校の頃にくらべると隔世の進歩です。それをみてから将来はだんぜん飛行機をやるうと決心したんです。ところが家の連中が飛行機なんかやめろ、落ちたらどうする。(笑) それで大分議論したんです。

郡 御兄弟は？

山本 私は長男なんです。

郡 なるほど、それじゃよい反対される。(笑)

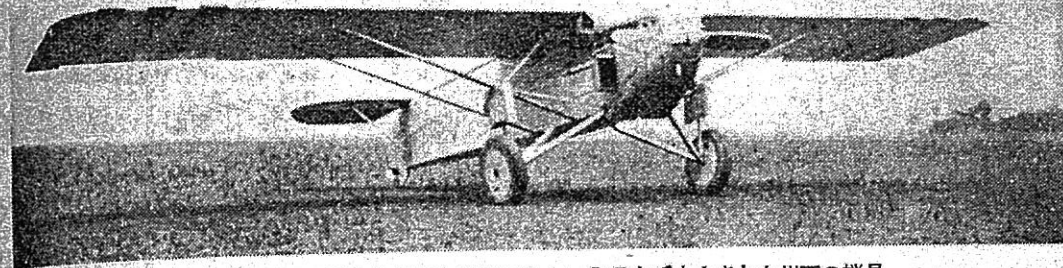
山本 そんないきさつがありましたね。もうかるからやろうというんじゃなくて、自分がやりたいからやろうというわけで入っちゃったんです。

郡 中学、高等学校からいっしょに東大に入った人はいないんですか？

山本 いまね。

郡 大学は何期になりますか？

山本 航空学科の第6回です。



太平洋横断を企図しながらも性能不足という理由で中止された川西の桜号

郡 先生と同期の方は？

山本 いま京都の三菱に行っている井上慎吾さん、それから浅井鉄太郎さん。

郡 先生はだれでしたか？

山本 砂田先生や横田先生でした。

郡 和田先生は？

山本 和田先生はその頃は航研です。航空学科には講義をもっておられなかった。

桜号のことなど

郡 卒業してすぐ航研ですか？

山本 三菱へ行っていたのですが、そのうち航研に来たらどうだといわれた。航研にはその頃、空席がなかったんですが、しかし入って研究していれば、そのうちに籍があくだらうといわれて……。

郡 定員というのがやかましかっ

たですからね。

山本 で、それじゃあ航研に行くということになりまして、それで三菱の方をこことわっちゃたんです。文部省の囑託として航研から給料をもらいましてね。ちょうどその頃太平洋横断の桜号というのがありました。その桜号の審査委員会というのがあって、私の属していた飛行機部の岩本先生がその委員をしておられた。そんな関係から“君は桜号の性能計算、強度計算の審査の内覧をやってくれ”といわれましてね。飛行協会の囑託としていろいろ実験をやりました。で桜号をね、7月だったかな、各務原で試験したところが、どうも性能がよくないんです。

郡 よく犬山城の上を飛んでましたね。

山本 その頃航研には小川さん、岩本さん、有川さんの3人くらいしかなくて、仕事は何をやってもよ

かったわけですよ。ちょうど小川さんがベルリンから帰ってきた頃でね。

郡 ケムリ風洞をもってきましたね。

山本 ええ、そうなんです。飛行機の機体を横から写真に撮って離着陸の性能をはかったりするのをもってきましてね。小川さんはベルリン大学の講義をききまして飛行機の強度をやられたものですから、私にも“強度をやれ”ということになった。僕はそれまで安定をやっていたんですがね。

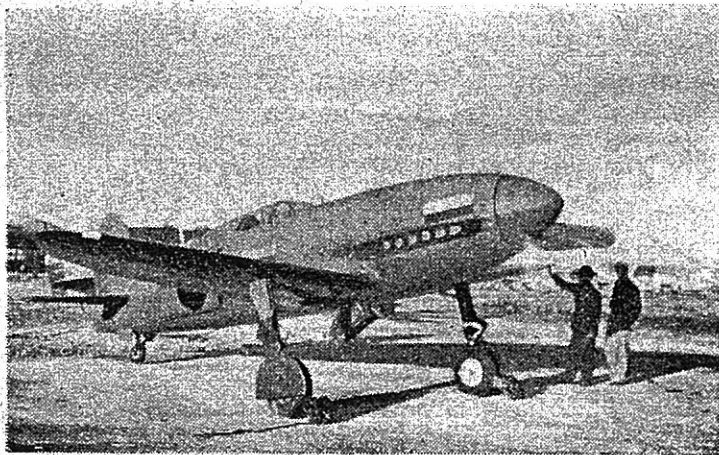
よかった当時の研究費

郡 私が先生をお訪ねするようになった時は強度の権威者でしたね。振動の試験をやっていたらしゃいました。あの頃の先生のお部屋は非常に航研の先生らしい、まあ質素ではあるけれどもおちついていらした。

航空機の安全のために高度の技術と設備を提供する

JAMCO

日本航空整備株式会社
 東京都大田区東京国際空港内 電話 羽田(74)1181 2121



日本としては画期的な高速機だった研三機

なかなかゆっくりと、らくに研究をされているような雰囲気があったような気がしますね。

山本 しかしあのじぶんは徴用のがれの人がたくさん入って来てました。

郡 あの頃の経費はどうなっていたんですか。

山本 あの頃といっても、昭和5年に駒場に移ったばかりの頃は経費が少なかった。

郡 その後、天皇陛下がお成りになったりして……。あの当時はよかったですな。

山本 あのところのわれわれの研究費が年間 1,700 円でしたよ。(笑)

郡 ほほう。

山本 当時だって少なかったけれども、いまわれわれのいる地方大学

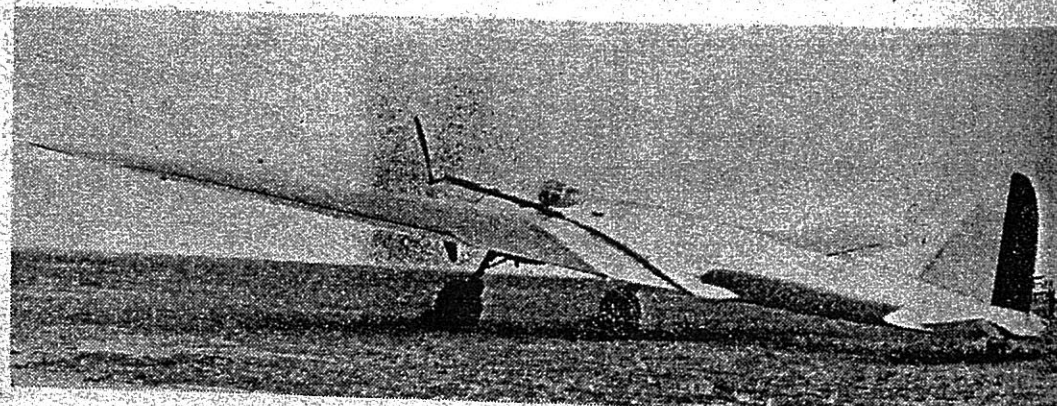
なんかの研究費よりはるかに多いですよ。今じゃあ研究費をいかに捻出するかで大へんなさわざですよ。当時はその点らくでしたな。当時の 1,700 円というと、いまどのくらいかなあ？

郡 あれで昭和 5~6 年でしょ。約 1,000 倍として 170 万円。

山本 いまの地方大学に来るのが約 10 万円程度ですから、ひどいもんです。大体、日本人では見栄坊というか、パツとハデな仕事をやりたがる。学問だってそうです。原子力だといえは猫もシャクシも原子力で、原子力にばかり予算を出す。もっと基礎的なところへ金を使ってほしいと思います。

郡 一つはジャーナリズムもわるい。

関係者の熱意が世界記録をつくらせた航研長距離機



山本 それは郡さんの方にも責任がありますよ。(笑)

郡 まことに申しわけありません。(笑)

手がけた飛行機

郡 先生が手がけられたのは航研機と研三と……？

山本 だいたいそんなものでね。あとはケ号というグライダー爆弾があったでしょう。あれをやりました。最後は梅花。

郡 梅花というとバルス・ジェット……？

山本 ええ、あれの図面をひかされてましてね、それが最後でした。

郡 一番楽しかったのはなんですか？

山本 そうですね。やはり航研機とか研三なんかはおもしろかったですよ。

郡 航研機は 30 万円くらいの費用で作り上げちゃったんですから、とにかくどえらい仕事でした。僕らは悪口いってたんですよ、学者の作った飛行機は理論が勝っちゃってうまくとべまい、てなことをね。あれに関しては先生方大変ご苦労があったでしょうね。

山本 そうですね。あれをやった人たちにとってプラスになったか、マイナスになったかは、わかりませんね。しかしおもしろかったですよ。まあ、あれは航研に予算をと

てくる手段ぐらいいしか考えていなかったんじゃないんですか、最初は。

郡 なるほど。

山本 それか、引受けた人達ととにかく成功させなければならぬような工合になってきて、シャニウムをやったわけです。

思い出す人びと

郡 和田先生は早くなくなられて惜しいですね。工業大学の学長でなくなられたんでしたね。小川先生がなくなられたのも惜しいですな。小川さんはちょっと親分肌みたいなどころがありましてね。

山本 そうでした。なかなか味のある人でした。小川さんは結局、航研解体問題で苦労されて、なくなれる 10 日前ころまでそのことを言っておられましたよ。あの人は気が弱いから、飲んだ時に言うんです。

郡 航研機を作る時は僕は東京にいたんですが、その前にずいぶん羽田の海防義会の格納庫に情報ももらいに行きました。何しろ朝日の家藤君の方はいいルートがある。私の方は鉄道・逓信その他に航研機をやらされたんでなかなか手がまわらない。ただ久藤富次さんね、ガス電の工場長の。あの人が僕と非常に仲よくなっちゃって、いろいろ教えてくれました。

山本 久藤さんは気さくな人でね。

郡 まあ、ちょっと名人カチギミみたいなところがありました。

山本 あのひとナグリ合のケンカをしたことがあるんですよ。(笑)

郡 ほほう。

山本 それかやはり強度の問題で意見がくいちがいましたね。しかしなかなか

の人物でした。

郡 研三ではなくり合いはなかったですか。(笑)

山本 研三では極めてなごやかでしたよ。

郡 僕は犬山城のすぐ下の所にとまっていたんです。迎帆楼とかいいましたが……。あれは何年ごろでしたかね。

山本 始めたのが 15 年で、出来たのが 17 年でした。しまいに B-29 の空襲が烈しくなってやめました。

郡 研三は世界速度記録をめざすという目的だったんですか。

山本 いや、そこへゆく中間機だったわけです。

郡 あれのエンジンは？

山本 ダイムラー・ベンツ 601 でした。ドイツからきたヤツを 3 台もらってそれをつけました。

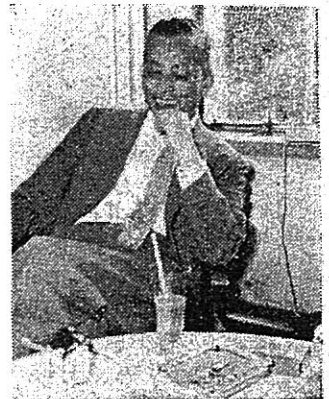
終戦前後

郡 先生、終戦の日はどうなさってました？

山本 終戦の日には航空学会の講演会でね、長野市で。だから長野で終戦を迎えました。その時、仕事はケ号を量産してまして……。

郡 例の爆弾ですな。

山本 これは、発案者は別にあ



あのひとナグリ合のケンカをしたことがあるんですよ。

たんです。

郡 ほほう、そうなんですか。

山本 敵艦の煙突から赤外線をとって自分で舵をとって命中するしかけです。これを浜松でやってみたらうまくゆかない。どうも舵がへんだからみにきてくれといわれまして行ったんです。しらべてみると舵はガタガタで、舵の剛性がすごくヤワなんですよ。これじゃあとうてい当るはずがない。設計しなおしてくれといわれたんですが、その頃、私、とても忙しくてね、1人じゃ出来ないから、大学を出た人を 4~5 人よこせていったんです。そうしたら早稲田を出た大尉か中尉ぐらいの人でしたが、6 人ぐらい来まし

洋紙・和紙・板紙・段ボールの製造



日本紙業株式会社

取締役会長 南 喜一
取締役社長 三 浦 正 樹

本社 東京都千代田区神田神保町1丁目21番地
電話 (29) 7 2 7 1 - 5
営業所 大阪市西区新町南通3丁目37番地
電話 新町局 (53) 2 3 5 5 - 8
工場 亀有(東京) 荻防(山口) 伊野(高知) 大阪(大阪)

て、私の隣の部屋で設図をやらせた。それから強度試験をやって、これでうまくやれば当たるだろうという自信ができてきて、兵庫県の竜野で大量生産にかかったときに終戦になりました。

郡 試作やテストは？

山本 いきなり大量生産をやったんです。大丈夫にきまってる、といって。くわいことは私たちには知らさないんですよ。

郡 防チョウですか。(笑)

山本 ただわれわれのやる胴体の木製部とか舵とか、操作装置などを知らせてくれるだけでした。

郡 数は？

山本 当時、もう数百機できていましたでしょう。

郡 上陸作戦にそなえたものですね。

山本 ええ、そうです。

郡 終戦後は先生方もわれわれもひどい苦勞をしてしまいましたね。その困苦の時代をへて、先生が自動車を専門におやりになって楽しんでいらっしゃるようですが、いまの航空工業界をごらんになっていかがですか？

山本 航空工業界も自動車工業界も同じですが、日本では下請工場とか部品工場が全部バラバラでしょう。基礎ができてないからいい飛行機が出来ないんです。部品もノックダウンの部品を組立てるぐらいならできるといえるでしょうが……。

郡 それでも日本でやったのは悪口をいわれたりなんかして……。それから自衛隊の飛行士なんかも、国産機はいやがって乗らないというウワサがありますが、困ったことですね。

山本 そういえば、この頃よく落ちますね。落ちているのは国産ばかりですか。

郡 この間はクラッシュバリアを突破して……。 (笑)

山本 そうでした。

留学雑感

郡 先生がヨーロッパに行かれたのは何年ですか？

山本 昭和13年でした。

郡 13年でしたか。ちょうどハイケルのジェットが飛んだ時に、汽車から見えたとかいうことですね。

山本 ええ、そんなこともありましたね。

郡 あの頃は向うで大分らくをされたんじゃないですか？

山本 あの頃は日本は支那事変で少し暗澹たる気持でしたでしょう。その頃ドイツにいと何十年も進歩してるように感じましたね。自動車の道路にしても、いまでも話すとみんな驚くんですが、あるとき、国際見本市がありまして、その帰りに夜ベルリンへドライブしたんです。そうしたら、ヘッドライトの波がタテにずっと並んでついてくる。これは時代が違うんだなと思いましたよ。それがタクシーじゃあないんでみな一般の人が運転しているんです。本当に感激したものです。その時代はずいぶん楽しみました。いまでいうドライブクラブから自動車を借りましてね。たいていオベルのキャデットというのを借りるんですが……。電話で注文すると色までこちらの好みのものを貸してくれるんです。土曜、日曜は大にそれでドライブしました。

郡 どうしてドイツであんなりっぱな道路ができて、日本じゃあできないんでしょうね。

山本 戦後10年たっても、まだ出来ないなんて。今でも東海道の道があんななんですから問題になりませんよ。

郡 先生のご趣味は飛行機だけですか？

山本 いや、趣味というのは別がないんですが……。

郡 お酒でしょう？ (笑)

山本 いやどうも、最近には飲み

せんよ。近頃はもっぱら写真の方です。

“航情”への注文

郡 航空情報について何かご希望はありませんか？

山本 いつもよく拝見しておるんですが、だんだん号を追って色彩が違ってきようですね。まあ、いろいろ注文をつければ、基本的な知識を与えるような講座をふやしてもらいたい。飛行機の型がどういふわけでごうなっているとか、どうして性能がいいのかというようなことがよくわかるようにしていただくと非常にいいんじゃないかと思うんです。例えば、高等学校でやっている数学や物理などを使って、飛行機がけがるというように、そして気安くおもしろく読めるような講座がほしいと思います。日本の航空は一時中断されてたわけですから、何年か経っても若い人を養成しなければなりません、そういう意味で本誌への期待も大きいと思います。

郡 やれとか、やるなどかいつも問題になるのは「日本軍用機」なんかの回顧ものですが……。

山本 私はね、“俺が敵の飛行機を何機やったんだ”というような真記ものは論外ですが、ぼくらの先輩のつくった飛行機がこれだけのことをやったんだという、技術的、科学的なことは大に書いていいと思うんですがね。その点ドイツはハッキリしてますよ。いま、僕のところにきているドイツの雑誌や本なんか読んでみますと、実に第2次大戦中の飛行機のごとが多く書れていますね。その中には誘導弾のごともあります。ドルンベルガーの書いたV2号というのをこの間読んでみました。とてもおもしろいですね。これを誰か全訳したらおもしろいと思いますかね。

郡 いろいろありがとうござい